LOS CAPRICHOS

芥川龍之介

笑(わらひ)は量的に分てば微笑(びせう)哄笑(こうせう)の二種あり。質的に分てば嬉笑(きせう)嘲笑(てうせう)苦笑(くせう)の三種あり。……予が最も愛する笑は嬉笑嘲苦笑と兼ねたる、爆声の如き哄笑なり。アウエルバツハの穴蔵に愚昧(ぐまい)の学生を奔(はし)らせたる、メフイストフエレエスの哄笑なり。

――カアル・エミリウス――

ユダ

逾越(すぎこし)［＃「逾越」は底本では「逾趣」］と云へる「種(たね)入れぬ麺包(パン)の祭(まつり)」近づけり。祭司(さいし)［＃「祭司」は底本では「祭

史」の長（をさ）学者たち、如何（いか）にしてかイエスを殺さんと窺（うかが）ふ。但（ただ）民を畏（おそ）れたり。偖（さて）悪魔十二の中（うち）のイスカリオテと称（とな）ふるユダに憑（つ）きぬ。ユダ橄欖（かんらん）の林を歩める時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長（をさ）たちに売（わた）せ。然（さ）すれば三十枚の銀子（ぎんす）を得べし。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエルサレムの町をさまよへる時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長（をさ）たちに売（わた）せ。然（さ）らずば爾（なんぢ）もイエスと共に、必（かならず）十字架に釘（つ）けらるべし。」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのもとに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠に爾（なんぢ）[#ルビの「なんぢ」は底本では「なんじ」]を知る。

爾は荒野《あらの》の獅子《しし》よりも強し。但小羊《ただこひつじ》の心を忘るる勿《なか》れ。」ユダ、イエスの言葉を悦べり。されどその意味を覚《さと》らざりき。逾越《すぎこし》の祭《まつり》来りし時、イエス弟子と共に食に就けり。悪魔三度《みたび》ユダに云ひけるは、「イエスを祭司の長《をさ》たちに売《わた》せ。然《さ》すれば爾《なんぢ》の名、イエスの名と共に伝はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黒暗《やみ》よりも恐怖あらん。爾は天国の奴隷《しもべ》たらざるも、必《かならず》地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾《なんぢ》［＃ルビの「なんぢ」は底本では「なんじ」］の妃《ひ》、七頭《しちとう》の毒竜は爾の馬、火と煙と硫黄《いわう》とは汝《なんぢ》が黒檀《こくたん》の宝座《みくら》の前に、不断の香煙《かうえん》を上《のぼ》らしめん。」ユダこの声を聞［＃「聞」

は底本では「闇」」きし時、目(ま)のあたりに地獄の荘厳を見たり。イエス忽ちユダに一撮(ひとつまみ)の食物を与へ、静かに彼に云ひけるは、「爾(なんぢ)が為さんとする事は速かに為せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出でたり。時既に夜(よ)なりき。ユダ祭司の長(をさ)カヤパの前に至り、イエスを彼に売(わた)さんと云へり。カヤパ駭(おどろ)きて云ひけるは、「爾(なんぢ)は何物なるか、イエスの弟子(でし)か、はたイエスの師か。」そはユダの姿、額は嵐の空よりも黒み、眼は焔よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。……

眼

――中華（ちうくわ）第一の名庖丁（めいはうちやう）張粛臣（ちやうしゆくしん）の談――

眼をね、今日（けふ）は眼を御馳走しようと思つたのです。何（なん）の眼？　無論人間の眼をですよ。そりや眼を召上（めしあ）がらなければ、人間を召上つたとは云はれませんや。眼と云ふやつはうまいものですぜ。脂があつて、歯ぎれがよくつて、――え、何（なに）にする？　まあ、湯（タン）へ入れるんですね。丁度（ちやうど）鳩の卵のやうに、白眼（しろめ）と黒眼（くろめ）とはつきりしたやつが、香菜（シヤンツアイ）が何かぶちこんだ中に、ふはふは浮いてゐやうと云ふんです。どうです？　悪くはあ

りますまい。私（わたし）なんぞは話してゐても、自然と唾気（つばき）がたまつて来ますぜ。そりや清湯燕窩（せいたうえんくわ）だとか清湯鴿蛋（れいたん）だとかとは、比べものにも何（なに）にもなりませんや。所が今日（けふ）その眼を抜いて見ると、――これにや私も驚きましたね。まるで使ひものにやならないんです。何、男か女か？　男ですよ。男も男も、髭（ひげ）の生えた、フロツク・コオトを着てゐる男ですがね。御覧なさい。此処（ここ）に名刺［＃「名刺」は底本では「名刺」］があります。Herr Stuffendpuff. ちつとは有名な男ですか？　成程（なるほど）ね、つまりその新聞や何かに議論を書いてゐる人間なんでせう。そいつの眼玉がこれぢやありませんか？

そら、壁へ叩きつけても、容易な事ぢや破れませんや。驚いたでせう。二つともこの通り入れ眼ですよ。硝子細工（ガラスざいく）の入れ眼ですよ。

疲労

雨を孕（はら）んだ風の中に、竜騎兵の士官を乗せた、アラビア種（だね）の白馬（しろうま）が一頭、喘（あへ）ぎ喘ぎ走つて行つた。と思ふと銃声が五六発、続けさまに街道（かいだう）の寂寞（せきばく）を破つた。その時白楊（ポプラア）の並木（なみき）の根がたに、尿（ねう）をしやんだ一頭の犬は、これも其処（そこ）へ来かかつた、仲間の尨犬（むくいぬ）に話しかけた。

「どうだい、あの白馬の疲れやうは？」

「莫迦々々（ばか）しいなあ。馬ばかりが獣（けもの）ぢやあるまいし、――」

「さうとも、僕等に乗つてくれれば、地球の極（はて）へも飛んで行（ゆ）くのだが、――」

二匹の犬はかう云ふが早いか、竜騎兵の士官でも乗せてゐるやうに、昂然（かうぜん）と街道を走つて行つた。

魔女

魔女は箒（はうき）に跨（またが）りながら、片々（へんぺん）と空を飛んで行つた。

それを見たものが三人あつた。

一人（ひとり）は年をとつた月だつた。これは又かと云ふやうに、黙々と塔の上にかかつてゐた。

もう一人は風見（かざみ）の鶏だつた。これはびつくりしたやうに、ぎいぎい桿（さを）の上に啼きまはつた。

最後の一人は大学教授 Dundergutz 先生だつた。これはその後（ご）熱心に、魔女が空を飛んで行つたのは、箒が魔女を飛ばせたのか、魔女が箒を飛ばせたものか、どちらかと云ふ事を研究し出した。

何（なん）でも先生は今日（こんにち）でも、やはり同じ大問題を研究し続けてゐるさうである。

魔女は箒に跨りながら、昨夜（ゆうべ）も大きな蝙蝠（かうもり）のやうに、片々と空を飛んで行つた。

遊び

崖に臨んだ岩の隙（すき）には、一株の羊歯（しだ）が茂つてゐる。トムはその羊歯の葉の上に、さつきから一匹の大土蜘蛛（おほつちぐも）と、必死の格闘を続けてゐる。何しろ評判の渾名（あだな）通り、親指位（くらゐ）しかない男だから、蜘蛛と戦ふのも容易ではない。蜘蛛は足を拡げた儘、まつしぐらにトムへ殺到する。トムはその度に身をかはせては、咄嗟（とつさ）

に蜘蛛の腹へ一撃を加へる。……

　それが十分程続いた後(のち)、彼等は息も絶え絶えに、どちらも其処へゐすくまつてしまつた。

　羊歯(しだ)の生えた岩の下には、深い谷底が開(ひら)いてゐる。一匹の毒竜はその谷底に、白馬(しろうま)へ跨(またが)つた聖ヂヨオヂと、もう半日も戦つてゐる。何しろ相手の騎士の上には、天主(てんしゆ)の冥護(みやうご)が加(くはは)つてゐるから、毒竜も容易に勝つ事は出来ない。毒竜は火を吐きかけ、吐きかけ、何度も馬の鞍(くら)へ跳り上る。が、何時(いつ)でも竜の爪は、騎士の鎧(よろひ)に辷(すべ)つてしまつた。聖ヂヨオヂは槍を揮(ふる)ひながら、縦横(じゆうわう)に馬を跳らせてゐる。軽快な蹄(ひづめ)の音、花々しい

槍の閃（ひらめ）き、それから毒竜の炎（ほのほ）の中（うち）に、毿々（さんさん）と靡（なび）いた兜（かぶと）の乱れ毛、……

トムは遠い崖の下に、勇ましい聖ヂヨオヂの姿を見ると、苦々（にがにが）しさうに舌打ちをした。

「畜生（ちくしやう）。あいつは遊んでゐやがる。」

Don Juan aux enfers

ドン・ジユアンは舟の中に、薄暗い河を眺めてゐる。時々古い舟（ふな）べりを打つては、蒼白い火花を迸（ほとばし）らせる、泊夫藍色（サフランいろ）の浪の高さ。その舟の艫（とも）には巌（いはほ）のやうに、

黙々と今日(けふ)も櫂(かい)を取つた、おお、お前！　寂しいシヤアロン！

　或霊(れい)は遠い浪の間(あひだ)に、高々と両手をさし上げながら、舟中(しうちう)の客を呪(のろ)つてゐる。又或霊は口惜(くや)しさうに、舟べりを煙らせた水沫(しぶき)の中から、ぢつと彼の顔を見上げてゐる。見よ！　あちらの舳(へさき)に縋(すが)つた、或霊の腕の逞(たく)ましさを！　と思ふとこちらの艫(とも)にも、シヤアロンの櫂(かい)に払はれたのか、真逆様(まつさかさま)に沈みかかつた、或霊の二つの足のうら！

妻を盗まれた夫(をつと)の霊、娘を掠(かす)められた父親の霊、恋

人を奪はれた若者の霊。――この河に浮き沈む無数の霊は、一人も残らず男だつた。おお、わが詩人ボオドレエル！　君はこの地獄の河に、どの位夥(おびただ)しい男の霊が、泣き叫んでゐたかを知らなかつた！

しかしドン・ジユアンは冷然と、舟中(しうちう)に剣(つるぎ)をついた儘、匂(にほひ)の好(い)い葉巻へ火をつけた。さうして眉一つ動かさずに、大勢(おほぜい)の霊を眺めやつた。何故(なぜ)彼はこの時でも、流俗のやうに恐れなかつたか？　それは一人(ひとり)も霊の中に彼程の美男(びなん)がゐなかつたからである！

幽霊

或古本屋の店頭。夜。古本屋の主人は居睡りをしてゐる。かすかにピアノの音がするのは、近所にカフエのある証拠らしい。

第一の幽霊　（さもがつかりしたやうに、朦朧と店さきへ姿を現す。）此処にも古本屋が一軒ある。存外かう云ふ所には、品物が揃つてゐるかも知れない。（熱心に棚の書物を検べる。）近松全集、万葉集略解、たけくらべ、アンナ・カレニナ、芭蕉句集、――ない。ない。やつぱりない。ないと云ふ筈はないのだが……

第二の幽霊　（これもやはり大儀さうに、ふはりと店へはひつて来る。）おや、今晩は。

第一の幽霊　今晩は。どうだね、その後君の戯曲は？

第二の幽霊　駄目、駄目。何処の芝居でも御倉にしてゐる。やつてゐるのは不相変、黴の生えた旧劇ばかりさ。君の小説はどうなつたい？

第一の幽霊　これも御同様絶版と来てゐる。もう僕の小説なぞは、誰も読むものがなくなつたのだね。

第二の幽霊　（冷笑するやうに。）君の時代も過ぎ去つたかね。

第一の幽霊　（感傷的に。）我々の時代が過ぎ去つたのだよ。尤も僕等が往生したのは、もう五十年も前だからなあ。

第三の幽霊　（これは燐火を飛ばせながら、愉快さうに漂つて来る。）今晩は。何だかいやにふさいでゐるぢやないか？　幽霊が悄然としてゐるなんぞは、当節がらあんまりはやらないぜ。僕は批評家たる職分上、諸君の悪趣味に反対だね。

第一の幽霊　僕等がふさいでゐるのぢやない。君が幽霊にしては陽気過ぎるのだよ。

第三の幽霊　そりや大きにさうかも知れない。しか

し僕は今夜という今夜、始めて死に甲斐を感じたね。

第二の幽霊　（冷笑すやうに。）君の全集でも出来るのかい？

第三の幽霊　いや、全集は出来ないがね。兎に角後代に僕の名前が、伝はる事だけは確になつたよ。

第二の幽霊　（疑はしさうに。）へええ。

第一の幽霊　（喜しさうに。）本当かい？

第三の幽霊　本当とも。まあ、これを見てくれ給へ。（書物を一冊出して見せる。）これは今日出来た本だがね。この本の中に僕の事が、ちやんと五六行書いてあるのだ。どうだい？　これぢやいくら幽霊でも、はし

やぎまはらずにはゐられないぢやないか?

第二の幽霊　ちよいと借してくれ給へ。（一生懸命に頁《ページ》をはぐる。）僕の名前は出てゐないかしら?

第一の幽霊　名前位《くらゐ》は出てゐるだらう。僕のも次手《ついで》に見てくれ給へ。

第三の幽霊　（得意さうに独り言《ごと》を云ふ。）おれもとうとう不朽《ふきう》になつたのだ。サント・ブウヴやテエヌのやうに。――不朽と云ふ事も悪いものぢやないな。

第二の幽霊　（第一の幽霊に。）［#底本ではここに句点］どうも君の名は見えないやうだよ。

第一の幽霊　君の名も見えないやうだね。

第二の幽霊　（第三の幽霊に。）君の事は何処に書いてあるのだ？

第三の幽霊　索引を見給へ。索引を。×××と云ふ所を引けば好いのだ。

第二の幽霊　成程、此処に書いてある。「当時数の多かつた批評家中、永久に記憶さるべきものは、××××と云ふ論客である。……」

第三の幽霊　まあ、ざつとそんな調子さ。其処まで読めば沢山だよ。

第二の幽霊　次手にもう少し読ませ給へ。「勿論彼は如何なる点でも、毛頭才能ある批評家ではない。…

……」

第一の幽霊　（満足さうに。）それから？

第二の幽霊　（読み続ける。）「しかし彼は不朽になるべき、十分な理由を持つてゐる。……」

第三の幽霊　もうそれだけにして置き給へ。僕はちよいと行(ゆ)く所があるから。

第二の幽霊　まぁ、しまひまで読ませ給へ。（愈(いよいよ)大声に。）「何(なに)となれば彼は――」

第三の幽霊　ぢや僕は失敬する。

第一の幽霊　そんなに急がなくつても好(い)いぢやないか？

第二の幽霊　もうたつた一行だよ。「何となれば彼は終始（しゅうし）一貫――」

第三の幽霊　（やけ気味に。）ぢや勝手に読み給へ。左様（さよう）なら。（燐火と共に消える。）

第一の幽霊　何（なん）だつてあんなに慌てたのだらう？

第二の幽霊　慌てる筈さ。まあ、これを聞［＃「聞」は底本では「闇」］き給へ。［＃底本ではここで改行、次行の始めかぎ括弧は天ツキ］「何となれば彼は終始一貫、芥川竜之介（あくたがはりゅうのすけ）の小説が出ると、勇ましい悪口（あくこう）を云ひ続けた。……」

第一の幽霊　（笑ふ。）そんな事だらうと思つたよ。

第二の幽霊　不朽もかうなつちや禍（わざはひ）だね。（書物を抛（はふ）り出す。）

その音に主人が眼をさます。

主人　おや、棚の本が落ちたかしら。こりやまだ新しい本だが。

第二の幽霊　（わざと物凄い声をする。）それもぢきに古くなるぞ。

主人　（驚いたやうに。）誰だい、お前さんは？

第一の幽霊　（第二の幽霊に。）罪な事をするものぢやない。さあ、一しよに Hades へ帰らう。（消える。）

第二の幽霊　ちつとは僕の本も店へ置けよ。（消え

る。）

主人は呆気にとられてゐる。

（大正十年十一月）

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社
　　１９６５（昭和40）年12月20日発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年1月26日公開
２００４年3月6日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。